

落穂拾い

ミレーの「落穂拾い」は有名ですが、画は近代フランスの田舎の風景です。

「ルツ記」は聖書の中で 10 ページばかりの短い物語です。未亡人のルツが落穂拾いをし、それが縁で畑の持ち主のボアズと結婚するのです。

後にその孫からダビデが生まれています。

ルツは死海の東に住むモアブ人の女性で、ユダヤ人ナオミの息子と結婚しユダヤの神を信仰します。ナオミの夫もルツの夫も亡くなり、二人とも未亡人となったあと、姑のナオミについてユダにやってきたのです。

この物語にはたくさんの律法の話が出てきますが、多くが土地と家系を存続させる法なのです。それを理解して読むことが必要です。

(1) ルツのような未亡人は実家に帰るのでなければ夫の兄弟と再婚するように決まっています。しかし兄弟はいません。姑ナオミは「私は年をとっています。もし再婚して子供を生んだとしても、その子が成長するまであなた(ルツ)は待ちますか」と言っています。

(何を言っているか、意味がわかりますか?)

(2) 「収穫時には貧しい者のために麦穂の一部を畑に残しておかねばならない」

(この意味はわかりやすいですね)

(3) 土地は神のもの。もし土地を売るときは近い親戚がそれを買い取ってその家業を継続させねばならない。もしその家に未亡人がいれば彼女を妻として迎えねばならない。(これが親戚の義務とされています)

ボアズはこの決まりにしたがってルツを妻とし、

彼女の亡き夫の土地を買取ります。実際には義母のナオミから土地・財産を買取り彼女の家にともに住むようになります。



ジャン・フランソワ・ミレー wikipedia 「落穂拾い」



Julius Schnorr von Carolsfeld

Ruth im Feld des Boaz wikipedia 「落穂拾い」